

於此トク逃るゝにしくはなしと度胸を定め、村の裏手に馳せ出つれば、韓人既に歸路と扼して容易に破らるへくもあらず、遙かに前面を望めば、獨り通辨の逸走するを認め得たりと雖も、尙ほ少年の影を見ず、是れ或は生擒せられしものに非すやと、疑ひ乍ら、且つ戦ひ且つ其の名を呼び、頻に搜索すれども不特、其の時一人あり、棍棒を眞向に振り上げ、道人を目懸け猛然として撃ち來る、逃走らんと欲すれども後より撲殺せらるゝ恐あり、此突嗟の間意を決し敵に向つて飛び込み、幸にして撃下し來る所の棒にスガルを得、引き倒して獲物を奪ひ、爾後近づく奴原は誰彼の嫌ひなく撃ち倒し、爪島のアゼ道を通過する折柄少年は不意に畠中より血にマミンながら道人を呼びかけ來る、於此大に喜び、且つ之に向つて「我に續くへし、愚圖々々すれば圍み愈加はらん、早く圍みを出れざる可からず、必ず我が後を離る可らず」と言ひ聞かせ、一直線に群かる中に飛び込めば、其勢に恐れ

けん意外に道を開きて通過せしめたり、仍て少年を前にやり追ひ來る敵を防ぎつゝ逃れんとしては馳せられども、身心早や既に疲れ果て、足全く動かさず、然るに敵の迫る事益急なるを以て、斯くして二人空く死せんより、已れ一人此所に倒れ、少年丈けなりと逃れしめん若かずと決心し、直に少年に向ひ殺さるゝ迄戦ふ可ければ卿は早く山に歸り、同志の連中に其旨を告げよ、夢引き返す勿れと云ひ捨て、後に返し様、第一に接近せし韓人の頭腦を一撃すれば、手に應じて倒れたり、第二の奴は其冠を被りたるを見辯へず、同じく頭部目懸けて打撃したるに之は倒るゝ迄には至らず、夫が爲め却つて我手元に付け込まれ、辛ふして投げ倒すを得たれども、衆既に四邊を圍み、向へば散り、散りては圍み、石を以て投げ撃つこと雨敵の如く、之か爲め忍ち我眉間を撃たれて地上に倒れ、殆んど昏絶せんとせり、然れども尙ほ手を面上に翳さして投石を防ぎ支へ、捕へんと寄付き來

る輩を蹴飛ばし、容易に之を近づけしめさりしが、既にして力全く盡き、無念ながらトウドウ彼等の手に縛せらるゝ事とはなれり、斯くて村盡づれの門に引きずり行かれ、今や土人の鈍刀の下に我頸をハ子られんとする際、買物の爲め來合せ居たりし鶏籠山腹の一寺僧、變を聞いて急に馳せ來り、衆を慰めすかし、金三十貫文を以て道人の身を購ひ取り、漸々縛を解きて逃れ去らしめたり、歸途又同志の來り救ふに逢ひ共に新元寺の陣に歸着して傷を養ひ、九日を経て後漸く腰の起つに至りぬ

失敗に依つて柔道の工夫を凝す

歸來滿身の打撲傷を改め見れば、何處も彼處も赤黒紫の種々の色を現じ、破れ甚き處は傷の骨に達するあり、或は甚だしからざる個所は皮膚の破れたる位に過ぎざる所もあり、就中縛せられて後、彼等に喰ひ切られたる肩肉は傷中に於て最も

痛みを感じ、苦悶頗る甚だしければ、餘り無念なる儘、臥床に仰臥し乍ら、争闘中の有様を回想して柔道の研究に心を移し、諺かに苦悶を忘るゝこととせり。此に可笑しきは争闘の際、和服を着け居りし爲め袖の不自由なりしと見へ、何時の間にかやら腰肌を脱ぎ、下シャツ一枚となりしを知らず、又敵に腰の廻りに取り付かれし際、其脱ぎ掛けたる衣を奪はれ腰には帯一つとなりしにも氣付かず甚だしきは投石の爲め後頭部に骨に達する傷を受けしとも知らずありし事共なり、是等を以て見れば、當時如何に狼狽して無我無中なりしかを知るに難からず、今に思ひ出す度毎に愧がしき心地せらる、然し乍ら、斯かる際にも平常練修せる武術は自然に現はれて、思はぬ所に助かりし事多し、夫は町より裏手に逃げ出せる時追手の爲めに屢々突き倒されながら、スグ立ち上ることの速かなりし結果、捕へられざるを得しと、棒にて撃ち懸られし時、両手を揚ぐると共に飛び込みし爲め

打ち込み來れる棒の外づれて却つて我手に握るを得し等なり、又此の失敗に依つて經驗せしは平常の注意と云ふ事、及び實戰は疊の上の稽古と異り、足元平坦ならずして足の運び、技の施し方に相違ある事、脚胖草鞋の絞め方宜しきを得ざれば、働き自由ならざる事、精神上の鍛練最も必要なる事等なりし。

油断は失敗の原因

乗り得ても心許すな女小舟

高瀬の波のあらん限りは

此古歌は實に油断を戒めたる金言と云ふべし、之れも矢張り朝鮮にてありしことなるか、或地旅行の節、惡漢の爲め道を遮られて通過するを得不得、止むなく引捕へて田の中に投げ込み、其まゝ歩み去らんとせしに、彼は投げられなから石を拾ひ

て起き上り様、道人か面上を目眩む計りに撃ち付けたり、於此大に怒り、鞘刀の儘其向より撃ちたりしに、鞘は碎け、二撃して頭部を斬り割り倒れしめたる事あり、之等は實に油断より起りし失敗にて、譬へ投げ倒すを得たりとて、敵の動作に注意せしならば、撃たるゝ憂もなく、人を斬る誤ちもなかりしならん、誠に注意すべきは油断なり

悟の發端

朝鮮より歸來したる後、如何にもして精神上の工夫を積まばやと千思萬考すれども徹底せず、妄想百現、數月の間殆んど寢食を忘れ、時に保寧山人を訪ひて禪語を試み、問答を起し、疑義を解かんと欲すれども未だ眞の体を不得、或る時慶應塾に於て薩摩琵琶の會あるに臨み、琵琶法師山下利介か「佛とは何を岩間の苔

衣、只其儘の姿にて』と頗る妙へなる美音に歌ひ出せるを聞き、飄然として柔道の蘊奥、無我の境遇、凡て此に在りと悟り、喜びに絶へず終るを待たずして家に歸らんとすれば、明日皎々天に懸りて真如の態を示し、我をして益々妄想を散せしむる所あり、於此

起つ寢つ只其儘の姿かな

と句吟し、斯道啓悟の端緒を得たるが、後ち郷里に歸りて師より皆傳を授けられ秘傳を見るに及びて自剛天真是れ極意とあるに驚けり、嗚呼自剛天真、自剛天真自剛天真流は實に我流名なり、我は何を以て爾く苦しみ、何か故に平生口にする自剛天真に氣付かざりしや、目前の極意目前の道を究めず、徒らに遠く他山の石を尋ねて、得來れば本と是れ自家庭前の石と同一塊ならんとは喝

露西亞人と格闘す

西比利亞旅行中、後貝加爾州カイダローフスカヤ村に於て、伊太利人五名と共に馬車二輛を雇ひ、車聲轆々として長途を驅り來り、やがてポントルカ村を過ぎたる時馭者忽ち酒店に入り去り、久く待てども飲んで來らず、漸く促かし又馬車を進めて行く、馭者酒を被て醉氣甚く口角泡を飛ばし、漫に人を罵る、偶行旅の人あり、同行者正に六名、其風態を見れば或は是れ鐵路の工夫なるか如し、馭者一瞥大に之を罵る、彼等大に怒り、群り來つて馭者を乱打す、於是伊太利人傍より馭者の爲めに陳謝し、力めて仲裁を試んとすれども、六人之を聽かず、益々馭者を乱打せんとす、余は關係の身に及ばんことを畏れ、早く車上より下つて路傍に腰を休め、以觀して靜に事の治るを待つ、六人余等の外國人のみなるを侮り、仲裁の伊國人に向つて却て暴行を加ふ、伊人性敵愾心あり、然れども中途半端の發す

るを好まずして敢て抵抗せんとせず、六人意益々驕り、余が遙に離れて控へたる所に至り、詰問的口調を用ひ、沸々として甚だ罵詈する所あり、余敢て應せず、彼乃ち實然鉄拳を揮ふて余が頭部を打ち、更に暴力を逞ふして之に繼かんとす、余於是耐忍の意を一忘し、前後の顧慮を擲ち、猛然崛起、立ち上り様、直に足を舉げて一人の向脛を蹴り、急に進んで其前腹を突き、之を仰向に打倒し了る、爾餘の露人此状を見るや、奮激して悉く余の身邊に肉薄し、知人の讎を復せんとして頻りに鐵拳を動かす、余乃ち先頃者の脇下を潜り、臂にて之が脇腹を一突し、足を取つて引き倒し了る、此時早く一人復た余が背後に廻り、目を眩せしむる底の鐵拳を以て余が面部と痛撃せり、余尙は屈せず、其向ふ脛を蹴り、進んで之を腰投に懸け、立所に前に投じ了る、更に一人石を拾ふて投せんと欲する者あり、余又之を突き倒して地に踏み付たり、於是望観せる伊人等亦余に力を添へ、打つ

て他の二人を倒し、更に余の前きに投げ倒したる者迄も叩き散し、共に與に奮闘して竟に大勝を博せり、顧みて馭者を見れば、乱打の際頭に大傷を負ひ、而して醉氣益々劇く、地上に倒臥し乍ら尙は馬聲を止めず、別に一人の年少馭者あり、避事の起るや馬を停めて此處に走せ到り、仲裁せんと欲して却て横面を撃たれ、避易して退き、暫く他方に潜んで拳闘を望観す、然るに余等の敵を倒し盡すを見るや、彼れ急に酔馭者を助けて車上に載せ、余等を催促して鞭を掲げ馬を勵まし、倉惶として馳せ去る、蓋し是れ自他工夫黨の追撃を恐れ、急いで禿山の頂を越へんと欲したる者なり、既に頂を越ゆれば次第に下傾面となり、進行極めて迅速、又追撃の患なし、竟に山を下り盡して一川を渡り、之より原上に入る、時に日漸く没して三日月の影屢々として空に顯はれければ

我ながら心地よたりをうちきため

ゆくてさやかに三日の月影

と詠して首尾よく虎口を脱れたり、此の格闘に於て道人始めて當ての必要を感じ
頗る拳闘の術を講究し、前章既に記述したる勝負法を組み立て得たり

船中に於て露人と相撲ふ

露西亞人と船中に於て相撲ひし事二回あり、初めは二十八年、長崎より我郵船會
社の雇氣船ガーシー號にて浦潮斯德に航したるに、檢疫の爲め三日間上陸するを
得ず、乗客一同徒然なる儘雜談して相樂みたり、折しも張番の兵卒其中間に入り來
り甲板に出で、頻りに日清戦争の談を聞かんと欲す、年少の邦人中露語を能くする
ものあり、他に對して日本兵の強を説き、戦勝の偶然ならざるを談し、遂に彼を

擄掇し、露兵の支那兵と擇ふなきと放言す、於此彼沸然日本人と力を角せんと乞
ふ、少年乃ち答へて曰く、日本人は誰でも相手は擇はず、君か擇ふもの盡く相手
せんと、彼余の二偶に佇止せるを見、此の人と力を競へんと、無理やりに引きま
り出す、余は難義なる事に思へども、衆悉く立つて「面白し、ヤリ給へヤリ給へ」
と勸むるにぞ、止むなく露兵に對すれば、何か扱六尺有餘の肥滿せる強力の而か
も力を込めて一攫みにチッ倒さんとあせり掛り、襟及び腰の邊を兩手に握り押し
來る、去れど道人は之に逆らはず、チッられながら腰投にかけ、眞逆様に投げ付
ければ、彼大に驚き起き上り又組む、其の組む所を今度はアベコベにヒチリ倒
したれば、少し躊躇し頭を傾けて思案する体なり、依つて道人は今の内に避けん
ものと立ち去り掛りたるに、其スキをねらいて懲すまに又も足を蹴り來る、其足
の一本立になりし所を道人再び捕ひければ、彼は又もや大木を倒す如く打ち倒れ

で容易に起き上り得ず、既にして、突然立ち上りたれば、定めて復讐の爲め向ひ
 來るかと思つておれば、之は又案外コソコソとして己れの控へ室へ逃げ込みたり、
 是に於て一同はワット計り笑聲を發し、又余の働きを歎稱して遂に柔道家なら
 ずやと語り、遂に之を自白せしめられたり、其事九州地方の新聞に傳はり、爲め
 に父母をして氣を痛めしめし事ありき。夫れより蒲潮斯德に於ては柔道々場を開
 設し、之を天眞館と稱して今日迄も在留有志者の稽古をなし、繼ぐるに至れり、今
 一つは黒龍江の漁船中に於てありし事にて、其時も初合の勝は道人に歸したる
 所、船長等奮慨して更に金を賭して今一合を望み、同行の中野天門亦ヤル可シ
 くと勧めたれども、勝て金を取らば益々彼等を奮慨せしむる種となれば、賭は
 ずして之と懲らしめんものど、其談判を遂げ、又相手の露人を強く投げ付けて彼
 等の膽を破りし笑話あり、去れども是等は餘り柔道に裨益すべし事にもあらねば

略して其狀況を記せず

讀者諸君は唯事の大体に眼を注ぎ、著作本意の存する所を察し、而して斯道研究
 の材料に資せらるゝ所あらば是れ著者の最も本懐を得たる者なり

吹く風の、まゝに靡きて、青柳の

本樹動かぬ心ともがな

柔道 終り



韓海通漁指針

朝鮮沿岸圖附

定價金二圓五十錢

本書の有益なることは二六新報掲載の批評に依りて知らるべし

韓海通漁指針の評

黒龍會は嚮きに最新滿州圖露國鐵道全圖及び露國東方經營部面全圖を出版し、東方地理上細大の形勢と天下に知らしむることに於て既に力めたり、然るに今や又局面を轉じて海上及び通漁上より朝鮮を研究し來り、而して國民をして新に短艇一棹の外に無盡藏の遺利を探ぐることに注意せしめんと欲す、黒龍會の事業とする所、愈々着實なりと云ふべくして、世人の同會に對する之より益々重きを加ふるに至らん、今其韓海通漁指針の記す所を見るに 第一章には我通漁の沿革と、通漁に關する一切の規則を掲げ、第二章には現存せる通漁組合の規約より漁夫の取締及び漁夫の受けべき總ての

利便を説き、第三章には通漁に關係する朝鮮六道の沿海地理及び各漁港間の里程を記し、第四章には潮流潮汐氣象等論じ、第五章には重要水産物の種別、特質、漁法、産地を詳録し、第六章には通漁者の現状より各道に分布せる實況及び今後改良擴張を要する諸点を悉くし、第七章には重要漁業の狀勢を明にし、第七章には捕鯨業、第九章には漁獲物處分販賣の方法を示し、第十章には外人の捕鯨業、第十一章には韓人の水産業を説き、第十二章に至り著者の韓海通漁に對する希望を述べて此書を結び、更に附録として日韓修好條約、海關稅則、居留民規則等、朝鮮通漁者の知らざるべからざる諸要件を載せ、全編總て五百頁餘其通漁上の注意と觀察との周到綿密なること正に空前絶後の價值ありと云ふも溢美ならず、唯吾人は此の如き好著述が政府の保護の下に生存せる責任當局者たる朝鮮通漁組合聯合會の手に成らずして却て青年遠征家の團體たる獨立經營の黑龍會より出でたるを遺憾とせずんばならざる也

再版 露西亞論

(定價金四十五錢)

露國鐵道全圖附

本書刊行せられしより、露國の上下愕然として驚き、著者が細密なる觀察を以て、他邦人の能くすべからざる事となし、或は自國人の手に成りしものなるやを疑ふるに至る、而かも黑龍會出版部の廣告に拙なる、邦人をして如斯良著あるを知らしむる能はず、従つて露西亞の眞想を解得するに苦しましめたり、然るに頃日漸くにして露西亞論の眞相を知るものあり、購需の注文俄かに加はり來るも不幸にして既刊の書冊悉く賣り盡せり、於此体裁を改正し頗る美本とし更に再版行することとなせり

26/7/38

露國東方經營部面全圖

(定價四圓五十錢)

本圖の天下に比類なきは内外人の等しく認むる處尙も西比利亞滿州朝鮮の形勢を知らんと欲せば本圖なかるべからず

最新滿州圖

(定價五十錢)

滿州鐵道各停車場及び山川地名大增補再版

朝鮮分畫圖 (慶尙道部面) 一

(定價五十五錢)

從來朝鮮地圖と稱する者の世に公行せられたる者多しと雖も一として先人の製する所を襲奪せる者に非ざるは莫し是を以て誤謬は誤謬を承け脱落は脱落に次ぎ隣國の地理的大勢を研むるに於て困難一方ならず地圖編製に於て天下の重望を荷ひ來れる本會此時弊を見るに及んで馬んと默過するを得ん乃ち特に多年間八道を實踏せる

會員數名を撰んで前古未曾有の朝鮮分畫圖編製の任に當らしめ而して先づ我國に接近せる慶尙道部面より刊行し始めんとす刊成るの日は三十六年四五月の頃に在り東方に志ある諸君冀くば其期を俟つて一本を購ひ看よ何如に此新地圖の精確にして至便なるかを知るに足らん

發所行

東京芝區芝公園
十六號ノ六

黑龍會

大賣捌所

東京日本橋區
通三丁目

丸善書店

大賣捌所

東京神田區一橋
通七番地

有斐閣

明治三十六年二月二十日印刷
明治三十六年二月廿三日發行

不許
複製

定價金貳拾八錢

著作兼
發行人

印刷人

印刷所

發行所

賣捌所

東京市芝區芝公園十六號ノ六
内 田 良

東京市芝區芝公園十六號ノ六
宮 本 鏡 之 助

東京市芝區芝公園十六號ノ六
内 田 活 版 所

東京市芝區芝公園十六號ノ六

黑龍會出版部

東京市神田一ツ橋通町七番地

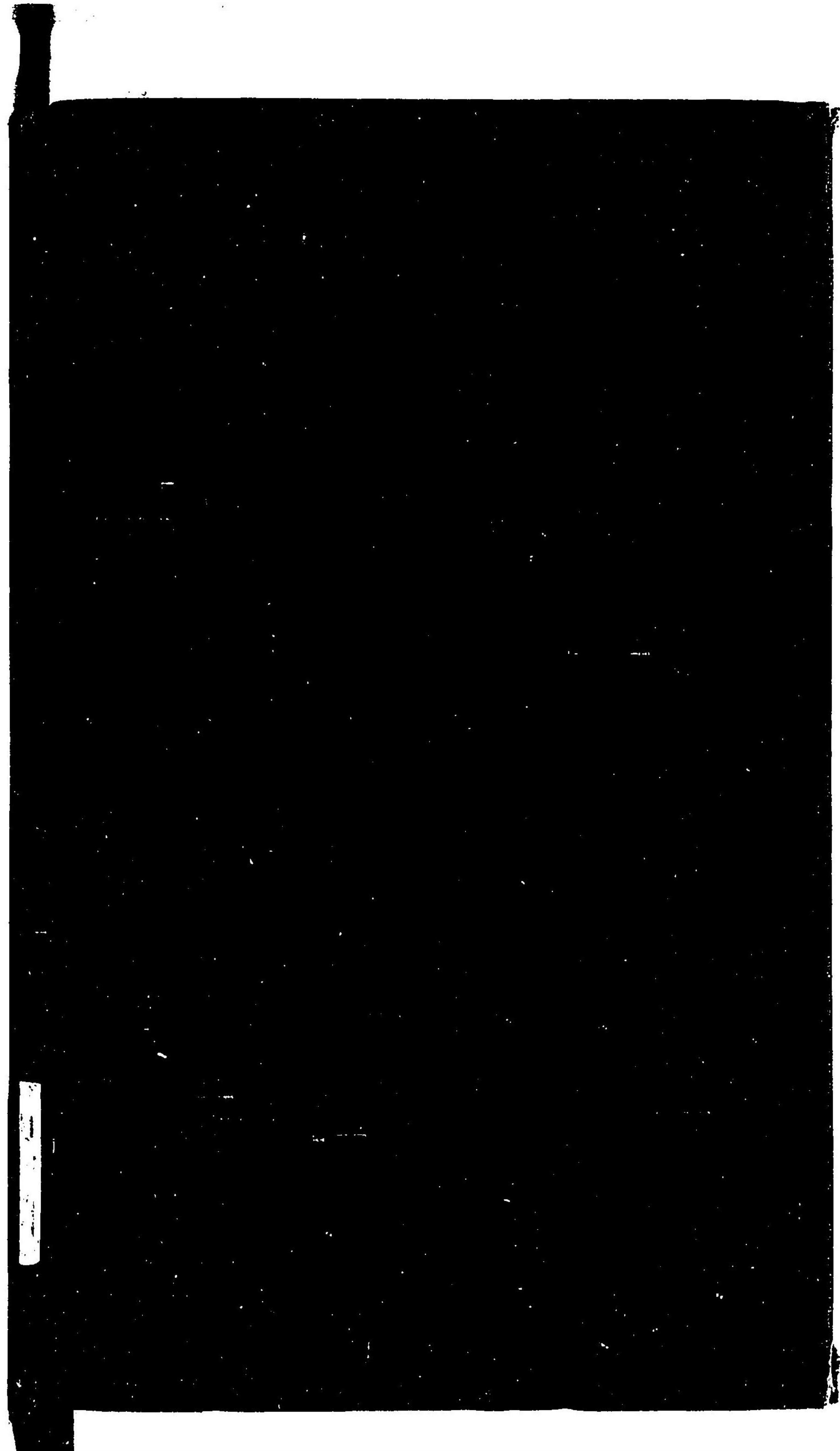
有斐閣書房

82
577

水鳥の足はせわしく 傷けと

心静に 遊ぶる波

82
577





075309-000-0

82-577

柔道

内田 良平/著

M36

CEM-0227

